

留学生を対象とした日本語指導の現状と課題

国際関係学科 宮谷 敦美

本報告では、2015 年度に開講された留学生を対象とした日本語科目と学修指導をめぐる課題について述べる。

1. 2015 年度開講日本語科目

本学の日本語科目は、教養教育科目として開講されている学部留学生対象の日本語科目と、交換留学生のみが履修する「学術交流協定大学留学生対象科目」の2種類がある。学術交流協定大学留学生対象科目は、2012年度から交換留学生の受入拡大に対応すべく整備が進められ、2014年度後期から開講されたものである。これらは教育支援センターが設置する「学術交流協定大学留学生対象科目小委員会」で教務内容を審議し、履修手続きやクラスコーディネートについては、国際交流室が担当している。

2. 授業内容および教室活動について

2.1. 学部留学生対象日本語科目

学部留学生を対象とする科目は、2014 年度より教養教育外国語科目が改定され、「日本語Ⅰ、Ⅱ」となった。1 年次(日本語Ⅰ)に大学での生活全般に必要な日本語能力と学修に必要な書きことばの基礎力を身につけること、2 年次(日本語Ⅱ)にレポート作成、発表・討論技術を養成することを目的としている。

旧カリ対応の日本語Ⅲ(3 年次以降)では、卒論の準備として要約などの練習も取り入れている。授業では、文章を学生が吟味する「ピア・レスポンス」の手法なども取り入れ、推敲能力など、大学生に求められる論理的思考の訓練も行なっている。これらの授業を履修している学生は学部留学生が中心であるが、日本語能力が上級(N2 合格相当以上)の交換留学生も履修している。このほか留学生対象科目として、「日本の文化」と「日本の社会」が開講されている。開講科目を表 1 に示す。

[表 1 2015 年度開講留学生対象教養教育科目]

主な対象	授業科目	開講時期	授業内容・目的
学部 1 年	日本語Ⅰ	前・後期	パラグラフ・ライティング能力養成
学部 1 年	日本語Ⅰ	前・後期	大学生活に必要な口頭表現能力養成
学部 2 年	日本語Ⅱ	前・後期	アカデミック・ライティング能力養成
学部 2 年	日本語Ⅱ	前・後期	発表・討論技術の養成
学部 3 年	日本語Ⅲ	前・後期	読解と要約技術の養成
学部留学生	日本の文化	前期	日本の韻文・文化(文学)
学部留学生	日本の社会	後期	現代日本社会事情

2.2. 学術交流協定大学留学生対象科目

交換留学生対象の科目は、主として日本語能力を養成することを目的としたものと、主として異文化理解を目的とした科目の2種類に分けられる。レベルは、前期は中級、中上級、上級の3レベルに対応、後期は初中級から上級の4レベルに対応した編成である。また、教養教育科目が、主として大学での学修に必要な日本語能力の養成を目的としているのに対して、交換留学生対象の科目は、日本語の基礎力の強化とともに、学生間のコミュニケーションを中心とした相互理解を目指したものや、リサーチを基にした日本文化理解など、プロジェクト型の教室活動を多く取り入れている点に特徴がある。

交換留学生は、学期始まりにプレイスメントテストを受験し、レベルと本人のニーズに合わせて、履修するクラスを決定している。開講科目を表2に示す。レベルの目安は、初中級が日本語能力試験(JLPT)N5合格、中級がN4合格、中上級がN3合格、上級がN2合格以上である。

[表2 2015年度開講学術交流協定大学留学生対象科目]

区分	授業科目	開講時期	レベル	授業目的
日本語科目	総合日本語Ⅰ(4コマ)	後期	初中級	日本語の基礎を学び、4技能についてバランスのとれた日本語運用能力を養成する
	総合日本語Ⅱ(4コマ)	前・後期	中級	
	総合日本語Ⅲ(3コマ)	前・後期	中上級	
	日本語実践A	後期	初中～中級	場に応じた適切な言語行動について理解を深める
	日本語実践B	前期	中～中上級	
	日本語文章表現	前・後期	中～上級	書きことばに関する基礎的な知識について学び、まとまった文章が書けるようになる
	語彙・漢字A	後期	初中～中級	トピックごとに、語彙と表記方法を体系的に学ぶ
	語彙・漢字B	前期	中～中上級	
異文化理解科目	トピックディスカッションA	後期	中～上級	現代日本の課題について、データに基づきクラスで討論を行ない、理解を深める
	トピックディスカッションB	前期	中～上級	
	プロジェクトワークA(2コマ)	後期	中～上級	調査を計画・実施し、発表にまとめることを通して、アカデミックな日本語使用を学ぶ
	プロジェクトワークB(2コマ)	前期	中～上級	
	Discover Japan	後期	初中級	地域の産業施設と歴史的建造物について講義とフィールドワークを行う。講義は英語で行う
	フィールド演習A	後期	中～上級	地域の産業施設と歴史的建造物について、講義フィールドワークを行う。講義は原則日本語で行ない、学生は日本語で発信する
	フィールド演習B	前期	中～上級	

2015 年前期は 28 名、後期は 30 名の交換留学生在が日本語のクラスを受講した。出身国と人数を表 3 に示す。

[表 3 交換留学生の出身国・地域と人数]

2015 年前期	中国 4、韓国 4、台湾 3、ドイツ 4、フランス 2、スペイン 2、メキシコ 5、ペルー 1、ブラジル 2
2015 年後期	中国 4、韓国 7、台湾 5、インドネシア 1、イギリス 1、ドイツ 1、フランス 5、メキシコ 4、リトアニア 1、ペルー 1

3. 日本語指導および留学生指導に関する改善点と課題

2014 年度と比べ、改善したことおよび課題について、3 点述べる。

①留学生指導に関する情報共有

留学生指導に必要な情報共有については、日本語科目担当、日本語教員課程担当、国際交流室教職員が manaba コースを利用して授業記録を共有している。これにより、留学生の日本語の学習状況だけでなく、彼らの生活状況を把握し、教員と事務員が協力して留学生を指導することができている。2013 年度までは、メーリングリストを活用していたが、2014 年度から manaba を導入した。2015 年度は、国際交流室との連絡にも活用されるようになり、蓄積された情報として閲覧することが可能となった。

②設定レベルより低い学生への対応

交換留学生の日本語レベルについては、JLPT N5 合格相当を最低ラインとして科目設定をしている。しかし、実際には毎年ほぼゼロ初級レベルの学生も参加する。このような学生は当然クラスでの日本語学習に困難を感じており、担当教員も復習課題を課すなどの対応をしているが、クラスの進度が遅くなり、他の学生の学習意欲が削がれるといった弊害もでてきている。これに対応するために、初級レベルの学生サポートを目的に、2014 年度から日本語教育実習生が中心となり、週 3 回 Active Communication という名称の補習を行なっているが、十分な対応であるとは言えない。今後も日本語レベルが低い学生を受け入れるのであれば、初級クラスの開講は不可欠である。

③プレイスメントテストと履修指導の実施

2014 年度後期に大幅に交換留学生が増え、留学生の履修指導において混乱があった。この反省を踏まえ、2015 年度は、国際交流室が行うクラスコーディネートの補助として、学術交流協定大学留学生対象科目小委員会から指名された教員が前・後期 2 回のプレイスメントテストの作成と実施、クラス分けと履修ガイダンスを担当した。履修手続きの指導は国際交流室の職員が担当した。2015 年度は履修ガイダンス時に学生のレベルと履修可能な科目を明示した上で履修指導を行なったため、2014 年度後期のような混乱は起きなかった。本学の日本語科目の大半は非常勤講師が担当しており、総合日本語のようなチームティーチングによる科目もあるため、履修指導の徹底は、スムーズなクラス運営にも不可欠である。今後、この体制をどう確立していくかが課題である。